（様式１）

「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」
平成２７年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名（推進地域）	兵庫県	番号	２８

市町村名（推進地区名）	協力校名	児童生徒数
篠山市	篠山市立八上小学校	１１４

○　実践研究の内容

１．推進地域における取組

（１）平成２７年度ひょうご学力向上推進プロジェクト

本県では、個に応じたきめ細かな指導の充実を図る新学習システムを推進するなど、学力の確実な定着を図る取組を進めるとともに、全国学力・学習状況調査の結果をもとに、児童生徒の学力や生活・学習習慣の状況等を把握し、指導の充実・改善を進めてきた。

これまで実施された全国学力・学習状況調査においては、児童生徒の全県的な状況として知識・技能を「活用する力」や言語の能力（ことばの力）の育成、学習・生活習慣の定着等の課題が明らかになっている。そこで、これらの課題等を踏まえ、学力の確実な定着に向け、より一層指導方法の工夫改善を図るため、「ひょうご学力向上推進プロジェクト」を実施し、以下の取組を行った。

ア　学力向上実践推進委員会の設置と学力向上シンポジウムの開催

平成２７年度の全国学力・学習状況調査の結果及び学習指導要領の趣旨を踏まえた効果的な学習指導や、「ことばの力」（言語の能力）の定着状況について検討し、指導方法の工夫改善をリーフレットにまとめるとともに、学力向上シンポジウム等を通じ、市町組合教育委員会、学校、保護者等と分析結果の共有を図った。今年度は、協力校の篠山市立八上小学校の研究担当者が学力向上実践推進委員となり、全国学力・学習状況調査に見られる本県の課題を分析するとともに、改善方策を提案した。

イ　中学校国語魅力ある授業創造研修

小学校までに培われた国語の能力を更に伸ばし、社会生活に必要な国語の能力の基礎を身に付けることができるように、授業改善の充実を図る研修会を実施した。

ウ　小学校算数の授業改善促進事業

基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着を図り、数学的な思考力・表現力を高めていくため、数・式・図・表・グラフ等を扱う算数的活動を充実させ、魅力ある授業とする実践研究を行った。また、算数科担当教員を対象とした研修会を通して、全県的に小学校算数の授業改善の促進を図った。

エ　ひょうごつまずきポイント指導事例集等の作成

「全国学力・学習状況調査」の結果から明らかとなった課題等を踏まえ、①分析により明らかとなった課題に対するポイントの整理、②つまずきの解消による学力の底上げを図るなど、各市町や学校における指導の工夫改善を支援するとともに、協力校を指定し、授業等を通した実践研究を行い、児童生徒の学習意欲を高める効果的な指導事例（モデル事例）を蓄積する３年計画の事業を開始した。

実施初年度となる今年度は以下の取組を行った。

①　指導資料作成検討委員会の設置

さらなる学力向上の方策として、基礎学力の向上に重点化し、平成１９年度より実施されている全国学力・学習状況調査において課題の見られた問題を、「知識」に関する問題（A）を中心に分析することにより、本県児童生徒のつまずきポイントを明らかにするため、学識経験者、教員等による指導資料検討委員会を設置し、分析・協議を行った。

②　学びサポート協力校（国語、算数・数学）の指定

授業等を通じた実践研究を行い、児童生徒の学習意欲を高める効果的な指導方法や作成する指導資料等の充実を図るため、学びサポート協力校を指定した。学びサポート協力校は、指導資料作成検討委員の所属する学校とした。

（２）推進地区や協力校に対する支援

ア　学力向上実践推進委員会による支援

学校教育関係者、大学関係者等で設置する学力向上推進協議会を設置し、協力校の訪問等で指導・助言や支援を行った。全国学力・学習状況調査の分析では、協力校の取組を踏まえて、指導法の工夫や授業改善の方策について協議を行った。また、篠山市が設置する「篠山市学力向上推進委員会」と情報を共有し、本県における学力向上に向けた施策と推進地区の取組を連携させることで、効果的な指導方法等について協議を行った。

イ　教育事務所に設置する学力向上支援チームによる支援

教員ＯＢのスーパーティーチャー、市教育委員会の指導主事等からなる「学力向上支援チーム」を教育事務所に設置し、推進地区、協力校における学力の定着状況や指導法の改善について検討するとともに、スーパーティーチャーを派遣する等、推進地区・協力校の個別課題に即応した支援を行った。

ウ　「ひょうごがんばりタイムー放課後における補充学習等推進事業ー」の実施

基礎学力の向上及び学習習慣の定着を図るため、市町提案による方法で、放課後の時間を活用し、教員ＯＢや大学生等の地域人材が児童生徒の補充学習等に関わった。協力校においては、算数科を中心として支援を行った。

２．推進地区における取組

（１）篠山市学力・生活習慣状況調査

児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題の検証・改善及び

児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てることを調査目的として実施した。また、生活習慣についても調査・分析することで、確かな学力を育むために、基本的な生活習慣・学習習慣の土台となる、児童生徒の「自己肯定感」を高めて学習意欲の向上を図るとともに、他者との関わりを豊かにして「社会性」を養うため、学級経営や生徒指導の指針作りに役立てた。さらに経年変化について分析できるように、調査対象を小学校４年生まで拡大した。

（２）問題データベース事業

問題データベースを取り入れることにより、授業に、復習に、宿題に、放課後学習及び習熟度別学習など、目的に応じたプリントを簡易に作成することを可能にすることを通じて学習の定着を図った。

また、学力調査等の結果をもとに、課題のある領域をまとめたプリントを作成できるほか、学年を超えた領域別学習のためのプリントも作成することができ、学校の実情、さらには個人の状況に応じた学力向上に努めることができた。

（３）学力向上プロジェクト事業

ア　学力向上研修会

篠山市の学校教育に関係する諸機関の代表者で構成する「篠山市学力向上推進委員会」の行政担当者が他市の学校等を訪問し、教育現場を視察することで直接関係者から話を聴いたり、意見交換をしたり、教育実践に触れたりしたことを研修会（市学力向上担当者を対象）で報告した。研修会で得た学力向上についての取組や大切なポイントを自校に広げることで、各校における学力向上に係る取組の充実が図れた。

また、篠山市学力・生活習慣状況調査の結果を踏まえて、「確かな学力」を育むため、学習指導要領に示されている内容について児童生徒の定着状況を把握し、指導計画の見直しや指導方法の工夫改善のあり方を明確にした。

イ　学力向上プロジェクトチーム

全国学力・学習状況調査の結果から学力向上に係る課題の改善方策を研究し、篠山市が作成したリーフレットやチェックシートを活用した「確かな学力」を育む授業改善に向けた取組を推進した。

３．協力校における取組

（1）「協同学習」を土台とする授業の創造を目指した取組

ア　発達段階に応じた協同学習の授業研究

ペア学習、グループ学習、ジグソー法と、学年が上がるにつれて授業に取り入れる協同的な仕組みのレベルを上げ、研究授業を積み重ねた。また、職員集団を低学年、中学年、高学年の３グループに分け、グループごとに授業参観、事後研究会での討議を行い、発達段階に応じた協同学習の授業実践について議論した。

イ　授業評価シートの活用

平成２６年度に作成した「授業構成の基本」に沿って授業を評価するため、授業チ

ェックシートを作成し、授業研究で活用した。

ウ　協同的な学びの土台となるコミュニケーションスキルの育成

協同的な学びに不可欠な話し合い活動の土台となる「話す・聞く力」を向上させるため、全学年共通の掲示物を用い、コミュニケーションスキルの育成に取り組んだ。

（２）基礎学力の向上

ア　朝の学習タイム（スキルタイム）

月曜日、木曜日、金曜日の朝学習タイム（１５分間）を活用し、計算と漢字学習に取り組んだ。定着の度合いを検証するため、毎学期末に到達度テストを実施した。さらに、学校オリジナルのスキルプリントを教室前キャビネットに常備し、児童が自ら選び取り組める環境を整えた。

イ　放課後における補充学習

基礎基本が定着していない児童を対象とし、放課後における補充学習を実施した。学校教員や外部講師（教職経験者）を指導者として、算数科を中心に週１回行った。

○　実践研究の成果

１．協力校における取組の成果

（１）「授業構成の基本」の定着

昨年度作成した「授業構成の基本」を共通理解し、実践に活かすことができた。児童もめあてを意識して学習したり、話し合いの中で課題解決をしたりできるようになってきている。

（２）コミュニケーションスキルの向上

グループでの話し合い方や司会の方法などのマニュアルを全学年で共有し、グループ学習を積み重ねることで、児童のコミュニケーションスキルが少しずつ向上してきた。低学年の話し方や聞き方についての技能はまだまだ未熟な面が多いが、高学年になると指導者が役割を指示しなくても自分たちで役割分担し、スムーズに話し合い活動をできるようになっている。学習の視点や課題を明確に与え、時間を十分に確保することで、話し合い活動の質は向上していくことが分かった。

（３）指導者の意識の変化

指導者の「教える」意識が「学ばせる」意識に変わってきた。いかに児童の学習意欲をかき立てるか、児童の学びの構造はどうなっているか、指導者自身の視点を少しずつ「学びの見取り」へと変化させることができた。授業研究会では、授業評価シートで視点を絞り、分析的に討議できた。議論の中で、指導者がこれまで何気なく実践してきたことや先輩教師から教わった技術や方法を、協同学習の理論と重ねて確かめることができた。

２．実践研究全体の成果

（１）推進地域（兵庫県）実践研究の成果

ア　全国学力・学習状況調査

平成２７年度全国学力・学習状況調査における本県の結果は、以下のようになっている。

	教科等		平成 27 年度（今回）			H26 年度（全国比較）
			本県	全国	比較	
小学校6年生	国語	知識	70.1	70.0	＋0.1	±0.0
		活用	65.5	65.4	＋0.1	－0.9
	算数	知識	75.2	75.2	±0.0	－0.4
		活用	46.9	45.0	＋1.9	＋0.2
	理科		60.3	60.8	－0.5	
中学校3年生	国語	知識	77.1	75.8	＋1.3	＋0.5
		活用	65.9	65.8	＋0.1	＋0.1
	数学	知識	67.1	64.4	＋2.7	＋2.2
		活用	42.8	41.6	＋1.2	＋1.5
	理科		53.3	53.0	＋0.3	

平均正答率の全国との比較では、小学校・中学校とも同程度（±5.0 ポイント以内）ではあるが、研究課題としてあげている国語、算数・数学では、すべての項目で全国平均をわずかではあるが上回った。平成２６年度に全国平均を下回っていた小学校の国語（活用）、算数（知識）においても改善傾向が見られた。

イ　ひょうごつまずきポイント指導事例集等の作成

３年計画の初年度となる今年度は、「つまずきポイントの整理と関連する学年での指導内容・指導事項の検討及び平成２８年度の方向性」をまとめていくことを大きな主題とした。国語、算数・数学において、児童生徒の課題となる「つまずきポイント」を整理するため、「ひょうごつまずきポイント指導事例集等の作成に係る指導資料検討委員会」を設置し、以下の取組により、次年度以降のつまずき解消に向けたさらなる授業改善の実践研究に資する資料を作成した。

①　ひょうごつまずき状況調査の実施

児童生徒のつまずきポイントを整理するとともに、つまずきの状況をより詳細に把握し、指導方法の工夫・改善につなげるため、各教科（国語、算数・数学）の学びサポート協力校における小学校第５・６学年、中学校全学年を対象に「ひょうごつまずき状況調査」を実施した。

調査問題の作成にあたっては、過去の全国学力・学習状況調査の主として「知識」に関する問題（A）において課題の見られた問題を抽出し、学びサポート協力校の指導資料作成検討委員が中心となって、児童生徒のつまずきの状況を把握するための教科に関する調査（小・中学校国語、算数、数学）及び児童生徒質問紙を作成した。

調査結果は、指導資料作成検討委員会において分析し、つまずきポイントの整理及び次年度の実践研究につなげる資料とした。

② 研究のまとめ（１年目）の作成

３年計画の実施初年度となる今年度の取組をまとめ、国語、算数・数学における児童生徒のつまずきポイントを明らかにするとともに、内容の系統性についても示すことができた。次年度以降の指導事例集の作成、指導場面の動画作成につなげ、児童生徒のつまずき解消を図ることとする。

（２）推進地区（篠山市）実践研究の成果

全国学力・学習状況調査及び篠山市学力・生活習慣状況調査結果から経年比較を実施し、児童生徒の実態把握に努めた。

児童生徒の実態から明らかになった課題は、学力向上プロジェクトチームで協議のうえ、改善策を学力向上研修会において市内学校に示すことで、学力向上の取組推進を図った。授業改善の視点として「聞き返しのある授業」の在り方について啓発することで、各校における授業の視点を明確にした。「聞き返しのある授業」とは、個の学びを充実させ、集団の学びを活性化させることを通じて、子どもたち同士の対話を引き出し、自らの考えを深めさせることを意図する。

また、市内学校イントラネットを活用し、各校において作成された課題改善を図る問題集を共有することで、各校の取組推進に向けた啓発が行えた。

３．取組の成果の普及

（１）推進地域（兵庫県）の成果の普及

ア 学力向上シンポジウムの開催

学力向上実践推進委員会で行った全国学力・学習状況調査の結果の分析及び指導方法の工夫・改善策は、県内の教育関係者が参加（1,005 名参加）する学力向上シンポジウムにおいて、基調報告で発表するとともに、学力向上実践推進委員会の学識委員等（6 名）によるパネルディスカッションにより、指導方法の工夫・改善及び次期学習指導要領に向けて大切にしていく考え方等の共有を図った。

イ リーフレット「平成２７年度全国学力・学習状況調査の課題を踏まえた学習指導等の改善・充実のポイント～確かな学力をはぐくむ授業改善に向けて～」の作成

学力向上実践推進委員会においてまとめた全国学力・学習状況調査の結果の分析及び指導方法の工夫・改善策は、リーフレットにまとめ、県内各学校に配布するとともに、義務教育課ホームページにアップした。

ウ ひょうごつまずきポイント指導事例集等の作成「研究のまとめ（１年目）」の作成

ひょうごつまずきポイント指導事例集等の作成に係る指導資料検討委員会を中心として、今年度の取組を「研究のまとめ（１年目）」にまとめ、県内の児童生徒の国語、算数・数学におけるつまずきポイントの整理とつまずきの系統性を明確にすることで、次年度以降の実践研究の資料に資することとした。作成した「研究のまとめ（１年目）」は各学校に配布するとともに、義務教育課ホームページにアップした。

（２）推進地区（篠山市）の成果の普及

ア　学力向上研修会の実施

学力向上プロジェクトチームを中心として行った、全国学力・学習状況調査及び篠山市学力・生活習慣状況調査の分析、先進校視察の報告等について、市内各校の担当者を対象とした研修会を実施することで児童生徒の学力の定着状況の把握、指導方法の工夫・改善策の普及を図った。

イ　市広報誌による情報の共有

学力向上プロジェクトチームを中心として行った、全国学力・学習状況調査及び篠山市学力・生活習慣状況調査の分析は、市広報誌に情報を提供することで、学校関係者だけでなく、保護者や地域に公開し、児童生徒の学力や生活習慣の状況について情報の共有を図るとともに、協力体制の構築に努めた。

ウ　平成２７年度パワーアップ問題集の作成

学力向上プロジェクトチームが分析を行った全国学力・学習状況調査結果における課題の改善策として、問題データベース事業の問題データベースを活用し、具体的な問題集としてまとめ、市内の各学校に配布することで授業改善に向けた資料とした。

○　今後の課題

全国学力・学習状況調査結果では、今年度国語、算数・数学において全国平均を上回る結果となったが、全国と同様「知識」に関する問題（A）に比べ「活用」に関する問題（B）では、継続して課題が見られた。次年度も今年度の取組を継続・充実させることで、各学校での指導方法の工夫や授業改善の推進を支援し、子どもたちの学力向上につなげていく。

また、今年度より実施している「ひょうごつまずきポイント指導事例集等の作成」では、今年度整理したつまずきポイントをもとに、各学びサポート協力校で授業実践を行い、児童生徒のつまずき解消に向けた指導事例集を作成していくことになる。作成した指導事例集については推進地区を含めた市町教育委員会と連携をとりながら、周知を図るとともに、事例集を活用した指導方法の工夫、授業改善を充実させ、児童生徒のつまずきの解消・学力の底上げを図っていく必要がある。

（様式２）

「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」
平成２７年度委託事業完了報告書
【推進地区】

都道府県名（推進地域）	兵庫県	番号	２８

市町村名（推進地区名）	篠山市

○　推進地区として実施した取組内容

１．研究課題

（１）本市における学力の状況

平成２６年度の全国学力・学習状況調査及び篠山市学力・生活習慣状況調査の結果としては以下の通りである。平成２５年度全国学力・学習状況調査に比べて全国平均正答率と篠山市平均正答率の差は、数学Ｂ以外は縮小しており、改善傾向である。

【国語】

教科全体では、全国平均正答率及び目標値に対しては±５ポイント内で同程度の範囲である。領域別に観ると小学校国語は、「書くこと」が低い。２段階構成で文章を書くことや３段階構成で伝えたい事柄を明確にして書く、条件作文の定着に課題がある傾向がある。国語科だけでなく、各教科、道徳、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動を通じて学校全体として取り組むことが大切である。

【算数・数学】

教科全体では中学校１年生以外は、全国平均正答率及び目標値に対して±５ポイント内で同程度の範囲である。領域別で見ると小学校では、「量と測定」「図形」「数量関係」が目標値に対して低く、中学校では「資料の活用」が全国平均正答率及び目標値に対して低い。算数・数学用語の概念理解と用語・概念を活用した記述や説明（事実、理由、方法など）を行う授業を展開する必要がある。また、算数Ｂ・数学Ｂの正答数分布グラフから上位層の割合が全国に比べて低い。学習形態の工夫、家庭学習の質と量、授業の終末に行う練習問題の内容について工夫が必要である。

【生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査の状況】

平成２５年度全国学力・学習状況調査に比べて、国語や算数において解答を文章で書く問題に対して最後まで解答を書こうとする児童生徒が増加している。また、いじめはどんな理由があってもいけないことだと思う児童生徒の割合が増加している。課題としては、携帯・スマートフォンやテレビゲームをする時間等が増えており、子どもの生活

の変化を踏まえ、学校や保護者が適切に指導する必要性が高まっている。
（学力定着に課題を抱える学校数：１６校／所管する小・中学校数：２１校）

（２）研究課題の設定

【国語と算数・数学を重点教科と位置づけた授業改善や検証改善サイクルの確立】

校内研修を充実させ、「めあて」と「まとめ」のある授業を徹底することで、学習のねらいを明確にした授業改善、指導力向上に取り組むとともに、調査結果から児童生徒の実態把握と授業改善に向けた分析評価の機会として、具体的な実践の計画→実行→評価→改善(補充）による学力補充に取り組む。

２．研究課題への取組状況

（１）篠山市学力・生活習慣状況調査

ア　学力調査

（ア）調査の目的

児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

（イ）調査の対象学年

小学校４年生及び小学校５年生
中学校１年生及び中学校２年生

（ウ）調査の内容

国語、算数・数学、理科

（エ）調査の実施日

平成２７年４月２１日（火）

イ　生活習慣状況調査

（ア）調査の目的

確かな学力を育むために、基本的な生活習慣・学習習慣の土台となる、児童生徒の「自己肯定感」を高めて学習意欲の向上を図るとともに、他者との関わりを豊かにして「社会性」を養うため、学級経営や生徒指導の指針作りに役立てる。

（イ）調査の対象学年

市内小学校４年生、小学校５年生及び小学校６年生
市内中学校１年生、中学校２年生及び中学校３年生

（ウ）調査の内容

児童生徒の学ぶ意欲や学び方、学習習慣・生活習慣等について意識アンケート

（エ）調査の実施日

小学校　平成２７年５月１９日（火）
中学校　平成２７年５月２０日（水）

（２）問題データベース事業

ア 目的

問題データベースを取り入れることにより、授業に、復習に、宿題に、放課後学習及び習熟度別学習など､目的に応じたプリントを簡易に作成することを可能にすることを通じて学習の定着を図る。

また､学力調査等の結果をもとに､課題のある領域をまとめたプリントを作成できるほか､学年を超えた領域別学習のためのプリントも作成することができ､学校の実

情、さらには個人の状況に応じた学力向上に努める。

イ 対象学年及び教科

小学校　１年～２年　国語・算数

３年～６年　国語・算数・社会・理科

中学校　１年～３年　国語・数学・社会・理科・英語

（３）学力向上プロジェクト事業

ア　学力向上研修会

他市の学校等を訪問し、教育現場を視察することで直接関係者から話を聴いたり、意見交換をしたり、教育実践に触れたりすることを通して、各校における学力向上に係る取組の充実を図る。

また、篠山市学力・生活習慣状況調査の結果を踏まえて、「確かな学力」を育むため、学習指導要領に示されている内容について児童生徒の定着状況を把握し、指導計画の見直しや指導方法の工夫改善のあり方を明確にする。

（ア）参加者

小・中・特別支援学校学力向上担当教員等

（イ）実施状況

第１回　平成２７年６月２５日（木）

内容　報告「篠山市学力・生活習慣状況調査の結果について」

第２回　平成２７年９月２日（水）

内容　講義「理科教育における言語活動の充実について

－全国学力・学習状況調査結果の分析の視点－」

近大姫路大学　教授　内山　裕之

報告「全国学力･学習状況調査の結果について」

第３回　平成２７年１０月２１日（水）

内容　福井県敦賀市における小・中学校視察

第４回　平成２８年２月１６日（火）

内容　公開授業　３年生「小数のたし算・ひき算」

報告「篠山市の授業スタンダードによる授業について」

「研究の取組について」（中学校１校）

「篠山市学力向上の取組について」

講義「活動に培う確かなわかり」

神戸大学大学院　教授　岡部　恭幸

第５回　平成２８年２月２３日（火）

内容　示範授業（小学５年生国語、中学２年生国語）

宮城教育大学　名誉教授　相澤　秀夫

講義「どの子にも学ぶ喜びと居場所を

－言葉と向き合い学びひたる姿を求めて－」

宮城教育大学　名誉教授　相澤　秀夫

イ　学力向上プロジェクトチーム

「学力向上プロジェクトチーム」を設置し、「学力向上プロジェクトチーム会議」を通じて本市の学力向上に係る課題の改善方策を研究する。本市が作成したリーフレットやチェックシートを活用し、「確かな学力」を育む授業改善に向けた取組を推進する。

（ア）構成員

小学校教諭２名、中学校教諭２名

（イ）実施状況

第１回　平成２７年８月２６日（水）

内容　全国学力・学習状況調査の結果分析について

第２回　平成２７年１０月６日（火）

内容　全国学力・学習状況調査結果を踏まえた改善策について

問題データベースの活用推進について

第３回　平成２７年１２月１日（火）

内容　第３回学力向上研修会の視察報告まとめについて

第４回学力向上研修会における公開授業について

第４回　平成２８年１月２６日（火）

内容　第４回学力向上研修会における公開授業について

３．実践研究の成果の把握・検証

全国学力・学習状況調査及び篠山市学力・生活習慣状況調査結果から経年比較を実施し、児童生徒の実態把握に努められた。

全国調査・市調査の結果

	小4		小5		小6				中1		中2		中3			
	篠山	比較	篠山	比較	篠山		比較		篠山	比較	篠山	比較	篠山		比較	
					A	B	A	B					A	B	A	B
国語	58.4	-7.9	68.2	+0.5	69.6	68.3	-0.4 (-0.8)	+2.9 (-2.3)	65.9	-1.1	61.8	-1.3	77.6	66.2	+1.8 (-0.1)	+0.4 (-1.5)
算数・数学	67.1	-6.2	64.3	-3.9	73.8	43.2	-1.4 (-2.9)	-1.8 (-3.5)	67.5	-1.0	61.0	+0.9	64.7	40.6	+0.3 (-2.2)	-1.0 (-4.2)
理科	63.8	-4.6	65.1	-2.5	57.4		-3.4 (-5.3)		59.4	-5.6	53.3	-2.6	51.1		-1.9 (+1.1)	

※小学６年生、中学３年生は全国調査。それ以外は市調査。
※比較＝全国調査は「篠山市平均正答率－全国平均正答率」、市調査は「篠山市平均正答率－目標値」。
※全国調査では全国平均正答率、市調査では目標値（正答できることを期待して設定された児童生徒の割合）の±5.0 ポイント以内を同程度としている。
※（　　）内は前回調査のあった平成 24 年度との比較の値。

生活習慣や学習環境などに関する全国調査から

		小学６年生		中学３年生	
		篠山	比較	篠山	比較
１日３時間以上、テレビやビデオを見る割合	H26	48.7	+10.7	34.4	+2.9
	H27	38.7	+2.6	30.2	-0.3
１日１時間以上、ゲーム（スマートフォンなど含む）する割合	H26	62.2	+7.5	62.6	+6.2
	H27	56.0	+1.4	58.7	+0.9
家で宿題をする割合	H26	85.5	-0.5	80.1	+16.4
	H27	90.9	+3.5	82.2	+16.4
家で授業の復習をする割合	H26	57.3	+3.3	56.4	+6.0
	H27	52.8	-1.7	65.8	+13.8
家で授業の予習をする割合	H26	41.3	-1.9	27.4	-6.8
	H27	38.4	-5.0	33.1	-2.2

【平成２７年度　全国学力・学習状況調査、篠山市学力・生活習慣状況調査結果より】

児童生徒の実態から明らかになった課題は、学力向上プロジェクトチームで協議のうえ、改善策を学力向上研修会において市内学校に示すことで、学力向上の取組推進を図った。授業改善の視点として「聞き返しのある授業」の在り方について啓発することで、各校における授業の視点を明確にした。「聞き返しのある授業」とは、個の学びを充実させ、集団の学びを活性化させることを通じて、子どもたち同士の対話を引き出し、自らの考えを深めさせることを意図する。

また、市内学校イントラネットを活用し、各校において作成された課題改善を図る問題集を共有することで、各校の取組推進に向けた啓発が行えた。

４．今後の課題

「確かな学力」の確立に向け、各校において授業の質の向上を図ることは重要である。個々の学校や児童生徒の実態に応じた指導方法の工夫改善を図るためには、児童生徒の実態把握を適切に行うことが必要である。そのためには、今後とも全国学力・学習状況調査及び篠山市学力・生活習慣状況調査結果等を活用し、実態把握に努めるとともに、課題の改善に向けた取組を市内学校で共有することを通じて、各校の取組の活性化を図ることが必要である。

（様式３）

「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」
平成２７年度委託事業完了報告書
【協力校】

都道府県名（推進地域）	兵庫県	番号	２８

協力校名	篠山市立八上小学校

○　協力校として実施した取組内容

１．協力校における学力に関する課題

「学習意欲の向上」と「基礎基本の定着率の向上」を大きな課題として、協同的な学びを実現する授業づくり・授業改善を目指して３年間研究を積み重ねてきた。これまでの児童の変容をまとめると次のようになる。

（１）授業中の学習活動に対する意欲の向上

グループ学習の中で自分の役割を持たせることで、責任を果たそうと意欲的に取り組むことができた。児童へのアンケート結果からも、グループでの話し合い活動について肯定的な意見を持つ児童が多いことが明らかになった。

（２）グループ学習の質の向上

互いの意見や考えを聞かないと答えや結論にたどり着かないので、必然的に「友だちの意見や考えを聞く」ことがしっかりできるようになりつつある。友だちと意見や考えを共有することで、学習にも広がりが感じられるようになってきた。友だちを認め合い、より良い人間関係づくりができるようにもなってきている。

一方で全国学力・学習状況調査などの分析結果では、大きな変化は認められなかった。正答率の低位群の児童では、学習に対する意欲の向上や授業態度の落ち着きなどの成果は見られるが、２極化状態が課題として継続している。また、話し合い活動を行うなかで、自分の考えを的確に伝えるための語彙力や表現力などにも課題がある。

２．協力校としての取組状況

（１）「協同学習」を土台とする授業の創造を目指して

ア　発達段階に応じた協同学習の授業研究

ペア学習、グループ学習、ジグソー法と、学年が上がるにつれて授業に取り入れる協同的な仕組みのレベルを上げ、研究授業を積み重ねた。また、職員集団を低学年、中学年、高学年の３グループに分け、グループごとに授業参観、事後研究会での討議を行い、発達段階に応じた協同学習の授業実践について議論した。

イ　授業評価シートの活用

平成２６年度に作成した「授業構成の基本」（**別紙参照**）に沿って授業を評価するため、授業チェックシートを作成し、授業研究で活用した。

ウ　協同的な学びの土台となるコミュニケーションスキルの育成

協同的な学びに不可欠な話し合い活動の土台となる「話す・聞く力」を向上させるため、全学年共通の掲示物を用い、コミュニケーションスキルの育成に取り組んだ。

（２）基礎学力の向上

ア　朝の学習タイム（スキルタイム）

月曜日、木曜日、金曜日の朝学習タイム（１５分間）を活用し、計算と漢字学習に取り組ませた。定着の度合いを検証するため、毎学期末に到達度テストを実施した。さらに、本校オリジナルのスキルプリントを教室前キャビネットに常備し、児童が自ら選び取り組める環境を整えた。

イ　放課後における補充学習

基礎基本が定着していない児童を対象とし、放課後における補充学習を実施した。本校教員や外部講師（教職経験者）を指導者として、算数科を中心に週１回行った。

３．取組の成果の把握・検証

（１）学習意欲や自己肯定感の向上

☆全国学力・学習状況調査の結果より（抜粋）

●「児童質問紙」項目による本校児童の学習意欲等に関する数値の推移（単位：％）

※①は「当てはまる」、②は「どちらかといえば、当てはまる」と回答

質問事項	年度	①	②	合計
難しいことでも，失敗を恐れないで挑戦していますか	H25	10.5	42.1	52.6
	H26	5.3	42.1	47.4
	H27	31.8	50.0	81.8
自分には，よいところがあると思いますか	H25	10.5	42.1	52.6
	H26	21.1	36.8	57.9
	H27	40.9	22.7	63.6
家で，学校の授業の復習をしていますか	H25	10.5	15.8	26.3
	H26	5.3	26.3	31.6
	H27	36.4	31.8	68.2
国語の授業で学習したことは，将来，社会に出たときに役に立つと思いますか	H25	26.3	57.9	84.2
	H26	47.4	36.8	84.2
	H27	54.5	40.9	95.4
国語の授業で意見などを発表するとき，うまく伝わるように話の組み立てを工夫していますか	H25	10.5	26.3	36.8
	H26	5.3	26.3	31.6
	H27	36.4	31.8	68.2

算数の問題の解き方が分からないときは，諦めずにいろいろな方法を考えますか	H25	10.5	57.9	68.4
	H26	15.8	63.2	79.0
	H27	50.0	27.3	77.3
算数の授業で学習したことは，将来，社会に出たときに役に立つと思いますか	H25	21.1	47.4	68.5
	H26	52.6	26.3	78.9
	H27	59.1	31.8	90.9
算数の授業で公式やきまりを習うとき，そのわけを理解するようにしていますか	H25	5.3	52.6	57.9
	H26	36.8	31.6	68.4
	H27	40.9	31.8	72.7

学習意欲や自己肯定感に関わる質問事項に対する肯定的回答率をH25とH27で比較　すると、ほとんどの質問事項で数値の向上が見られる。「算数の問題の解き方が分からないときは、諦めずにいろいろな方法を考えますか」の質問についても、合計の数値はやや下がっているものの①の最も肯定的な回答は大幅に上がっている。これらのことから、学習に対する意欲の向上や自己肯定感、前向きな態度などについての心情的改善を読み取ることができる。

（２）「授業構成の基本」の定着

昨年度作成した「授業構成の基本」を共通理解し、実践に活かすことができた。児童もめあてを意識して学習したり、話し合いの中で課題解決をしたりできるようになってきている。

☆全国学力・学習状況調査（児童質問紙）の結果より（抜粋）

項目番号	質問項目	本校値（%）	全国値（%）
（４０）	５年生までに受けた授業では，学級やグループの中で自分たちで課題を立てて，その解決に向けて情報を集め，話し合いながら整理して，発表するなどの学習活動に取り組んでいたと思いますか	45.5	32.4
（４１）	５年生までに受けた授業のはじめに目標（めあて・ねらい）が示されていたと思いますか	95.5	57.5
（４３）	５年生までに受けた授業で扱うノートには，学習の目標（めあて・ねらい）とまとめを書いていたと思いますか	86.4	66.6
（４６）	学級の友達との間で話し合う活動を通じて，自分の考えを深めたり，広げたりすることができていると思いますか	36.4	25.2

（３）コミュニケーションスキルの向上

グループでの話し合い方や司会の方法などのマニュアルを全学年で共有し、グループ学習を積み重ねることで、児童のコミュニケーションスキルが少しずつ向上してきた。低学年の話し方や聞き方についての技能はまだまだ未熟な面が多いが、高学年になると指導者が役割を指示しなくても自分たちで役割分担し、スムーズに話し合い活動をできるようになっている。学習の視点や課題を明確に与え、時間を十分に確保することで、話し合い活動の質は向上していくことが分かった。

脳みその交流　～学習班編　中・高学年～

司会：脳みその交流がスムーズになるように、交通整理をする役

＜使える言葉集＞
・○○さんはどう思いますか。
・今の意見はどう思いますか。
・○○さんはどうですか。
・他に意見はありませんか。
・私は○○○と思いますが、どうですか。
・あと○分です。

記録：脳みその交流を消えてしまわないように残しておく役

＜記録のコツ＞
・キーワード（大事な言葉）を書く。
・短くまとめて書く。
・聞き取れなかったら、もう一度言ってもらう。

ムードメーカー：脳みその交流を盛り上げる役

（４）指導者の意識の変化

指導者の「教える」意識が「学ばせる」意識に変わってきた。いかに児童の学習意欲をかき立てるか、児童の学びの構造はどうなっているか、指導者自身の視点を少しずつ「学びの見取り」へと変化させることができた。授業研究会では、授業評価シートで視点を絞り、分析的に討議できた。議論の中で、指導者がこれまで何気なく実践してきたことや先輩教師から教わった技術や方法を、協同学習の理論と重ねて確かめることができた。

☆授業評価シートの項目（５段階評価）
１　個別の学習活動について
（１）児童は学習課題を理解していたか。
（２）児童は個人思考を十分に行うことができたか。
（３）児童の多様な考えを引き出す活動だったか。
２　協同の仕組みについて
（１）児童は課題に沿って協同的に学習できたか。
（２）各個人の考えや役割が明らかになっていたか。
（３）児童は他人の考えを取り入れることができたか。
３　学習のまとめについて
（１）児童は学習課題を達成していたか。
（２）児童は協同の良さを感じていたか。

４．今後の課題

協同学習理論は全ての教科で実践可能で、あらゆる学習場面で応用することのできる理論であることから、これまでは教科を限定せず、各教師がそれぞれ実践しやすい教科・教材を選び、授業研究を積み重ねてきた。外部講師として指導助言をお世話になっている同志社女子大学の大黒孝文先生は専門外の教科による授業研究にも快く応じてくださり、各

自が取り組みやすい教科を選び授業研究をすることで、協同学習理論を無理なく研修することができた。しかし、教科を指定しない研究方法は各個人には有効であったが、学校全体としての取り組みとして、具体的な指導方法の共有という面では一貫性が低かった。次年度以降は協同学習理論を土台としたこれまでの流れを継承しつつ、ある程度教科を限定して、グループ学習の具体的な指導方法や形式などについて、発達段階に応じて系統性を意識した授業研究を行いたい。

また、全国学力・学習状況調査と篠山市の学力調査の結果を学力の現状を客観的に示す材料として、さらに活用する必要がある。篠山市の調査は次年度で３年目を迎え、同一集団の経年変化を追跡することができる。単年度の結果で各教科の平均点や正答率が低かった問題に対する課題を分析するだけでなく、学習意欲に関わる回答項目の変化や「話す・聞く」力に関わる正答率の変化などをさらに分析することも、研究や授業改善の効果を測るうえで有効だろう。今後も、研究経過の評価、改善に取り組んでいきたい。

【別紙】

《　篠山市立八上小学校　授業構成の基本　》

1　学習のめあてを示す

何を目指してこの１時間を過ごすのかを子どもの言葉で分かりやすく示す。

2　学習活動の方法を明らかにする

学習内容の理解を目指して行われる学習活動には、「ノートに考えをたくさん書く」や「ブロックを動かして考える」など、様々な形式が考えられる。特に、本時の中心となる学習活動の方法について説明し理解させることで、児童が自分の行動を想定することができる。

3　学習活動の流れを示す

「一人で考える」→「ペアで相談する」→「グループで相談する」→「発表をする」→「全体で共有する」など、学習行程を大まかな段階に区切って示す。児童は先を見通しながら必要な活動に集中することができる。

【流れが明示された黒板の例】

4　各自の役割を明らかにする

児童各自に責任感を持たせることで、学習への参加率を高めたり、自己有用感を味わわせたりする効果が期待できる。

5　個人思考の時間を確保する

各自が自分の考えを持つことによって、初めて意見交流が成り立つ。まずは、個人でじっくり考える時間を確保することが求められる。

6　思考を外化させる

ノート、ワークシート、ホワイトボードなど、考えたことを目に見えるように示したものを「思考の外化物」という。言葉による意思伝達の曖昧さを補うと同時に、集団の意識を一カ所に集中させることができる。

【外化物を指さしながら話す児童】

7　意見交流や試行錯誤の時間を確保する

集団の全員が意見表明したり意思統一したりするのに必要な時間は、所属人数が増えるほど多くなる。学級を小集団に区切っているとはいえ、全員の学習参加を保障するため、この時間をできるだけ長く確保する。

8　学級全体で学習内容のまとめをする

グループごとに発表させ、共通事項を探したり学習内容の収束につなげたりすることで、各自の学習内容の理解を深めさせる。

9　学習活動の振り返りをさせる

10　次時の学習について想定する

以上の項目は、基本原則であってマニュアルではない。教材の特性や学習内容、集団の発達段階や行動様式などにより項目数の増減を考える。